

平成 30 年 5 月 30 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(A) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25245079

研究課題名(和文) アジア共同学位の視点に立つ教員養成のためのアセスメント・リーダーシップの研究

研究課題名(英文) A study of Assessment and Leadership for teacher education based on Asian Erasmus Mundus

研究代表者

有本 昌弘 (ARIMOTO, MASAHIRO)

東北大学・教育学研究科・教授

研究者番号：80193093

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 15,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、『アジア共同学位の視点に立つ』『教員養成のための』『アセスメントとリーダーシップ』というテーマを掲げて、教員養成の質を担保していくため、アジア共同学位プログラムの視点に立って、欧州起源の概念であるアセスメントとリーダーシップという分野でその基礎を固め、将来の転換点とした。アングロサクソンからの参加者中心の会議の中でも存在感を大いにアピールすることができた。日本独自の教育文化があるため、「assessment&evaluation」という西洋と同じ俎上に乗しながら、Community of Practicesにも関わりつつ、概念枠組みと可視化を行うことができた。

研究成果の概要(英文)：This research aims to guarantee the quality of teacher training, with the theme of "stand on the perspective of Asian Erasmus Mundus", "for teacher training", "assessment and leadership", as a viewpoint of the Asian joint degree program He stood up and settled its foundation in the field of assessment and leadership which is the concept of European origin and made it the future turning point. I was able to appeal to a great presence in the meeting among the participants from anglo saxon countries. Due to the unique educational culture in Japan, we were able to visualize the conceptual framework which means participation in the Community of Practices, while sitting at the same table as the West of "assessment & evaluation".

研究分野：教育アセスメント

キーワード：学習 アセスメント リーダーシップ 教師の暗黙知

## 1. 研究開始当初の背景

わが国においても、形成的アセスメントの深い浸透が求められる。従来型の形成的評価は教師が意思決定の主体であったのに対して、それは、児童生徒が調整・制御し、将来に向けた認知・観察・解釈する意味となり、学習を観察するプロセス、学習プロセスにおけるエピソードそのもの、リフレクションと進捗状況の自叙伝的理解の一部にまで概念を拡張した。さらに、背景にある主要能力(キー・コンピテンシー)の究極の目標として「如何に学ぶかを学習する(ラーニング・ツアー・ラーン)」があげられる。この概念がこれからの教科授業の基盤となるであろう。OECDでは、教師のアセスメントリテラシーの立場を、形成的アセスメントに見出し、それを『質』向上の中核に位置すると考えている。国内では、学習指導面での形成的アセスメントと学校運営面での学習リーダーシップを切り離して論じられるが、本来は、学習のためのアセスメントを中軸に据えたより一層のあらゆるレベルでの改善こそが必要であり、それは、構成員の行動思考の動機づけの理解、さらに問題解決を可能にしその助けとなる事柄の関連性の理解につながり、授業・学校文化変容に資するものとなる。言い換えれば、このアセスメントリーダーシップは、教師をエンパワーするもの、アジア共同学位のテーマにふさわしいアジェンダとなる。

## 2. 研究の目的

本研究は、『アジア共同学位の視点に立つ』『教員養成のための』『アセスメントとリーダーシップ』というテーマを掲げて、教員養成の質を担保していくため、アジア共同学位プログラムの視点に立って、欧州起源の概念であるアセスメントとリーダーシップという分野でその基礎を固める。まず、教科での自己調整学習を踏まえ日本からのアセスメントの再定義を行う。その上で大震災を経験

した東北地方を日本のモデルとするような、モード2サイエンス(個人の主体的研究活動から異なる専門を持つ多数の研究者の共同作業へのシフト)から入り、モード3サイエンスを志向し「サステナビリティ」を切り口に未来志向の4つの概念をアジア共通の課題として据える通教科的設計に基づき、アセスメント・リーダーシップに対応した教員養成のテキストを生み出し、将来の転換点としていく。

## 3. 研究の方法

優れた「アセスメント」についてレビューし、背景にある社会文化的アプローチによる方法論と集約された研究知見の国際的な交流の繰り返しの中で、日本の小中高の学校での類似した経験からデータを収集し、東アジアの中での日本の経験を付け合わせ比較により練り上げることにより、日本の学校という社会文化、組織文化における自前の評価枠組を実証的に得る。

## 4. 研究成果

本研究では、「『アジア共同学位の視点に立つ』『教員養成のための』『アセスメントとリーダーシップ』」というテーマを掲げ、教員養成の質を担保していくため、アジア共同学位プログラムの視点に立って、我が国が欧米との緊張関係の中でアセスメントとリーダーシップという分野でその基礎を固めることができた。切り口として、算数・数学など教科での自己調整学習を踏まえて国内外で検証しつつ日本からのアセスメント概念の再定義から入る。と同時に震災を経験した東北地方を日本のモデルとすべく、モードサイエンス(個人の主体的研究活動から異なる専門を持つ多数の研究者の共同作業へのシフト)からのコンテンツを創る。その上で、未来志向の「サステナビリティ」を切り口にした諸概念をアジア共通の課題として据える教科

横断型の設計を試行し、最終的に教科とリンクした知見をもとに実績を積むことを目的とする。

中でも、カリキュラム改革の現代的な動向を踏まえて、1990年代までのスクール・ベースト・カリキュラム開発(SBCD)の伝統的なパラダイムを再検討した。今日SBCDは、持続可能性、起業家精神、グローバル化とシティズンシップのような未来指向の概念間の緊張として、伝統的なパラダイムに抗して発展してきている。またそれは形成的アセスメントとして学校での広い形で使用されることでウチとソトの拮抗作用としてのインセンティブへとSBCDを拡張している。ここでアセスメントは日本の文脈において文化に埋め込まれたペダゴジー（教授方法）という性質から吟味された。アセスメントは多くの場合、教育改革を進めるためのつまずきの石と見なされる。課題は、アセスメント実践と同様にスクールベーストでの取り組みのイニシアティブに関する経験のグローバルな交流を促進することである点を課題とした。

アセスメントについては、教室アセスメント（classroom assessment）に焦点を絞り、学びを創り出すアセスメント（Assessment for Learning: AfL）概念の日本型定義を教員調査により行う方向で検討した。

リーダーシップに関しては、教え方を変えたいくなるようなコンテンツの重要性を高等学校（あるいは、中等教育学校）にて共通理解して、発展させた。

さらには、アセスメントとリーダーシップの双方の関係については、特定の地域に焦点を絞り、代表者は、カナダで開催された専門家化会合において、日本の深い文化は、AfLという学びを創り出すアセスメントをより「うまく」「十全に」遂行するという仮説を得るに至った。その仮説に基づいて、アジアと日本独特なものと区別し、欧州での Earli 2012 会合にて行った提案である「気づき」

(Kizuki)を、地域の関係者、保護者や祖父母の影響も考慮に入れ、より精緻化した提案を行い、その一部は、Advances in Research on Teaching のBook Chapter において出版した。

いずれにしても、アセスメントとリーダーシップが、双方とも、participatory なアクションリサーチを必要とするものであることも判明し、様々な仕組みをもとに、学校や教員とコラボを行い、教室レベルから学校レベルに至るまで、草の根的な埋もれた「仕掛け」など、実践的知識を、ブラックボックスからガラスボックスにしていくように仕向けていく展望をもちつつ、国際的な俎上にも載せられるように、着実な成果を積み上げることができた。

また、カナダの実践と政策のネットワーク CAfLN (Canadian Assessment for Learning Network) に学んで、JAfLN (Japanese Assessment for Learning Network) という国際共同学位にも通じる国内外のネットワークのための、英語論文Cultural Perspectives on Classroom Assessment: A Path Toward the “Japanese Assessment for Learning Network” を海外に公表した。

こうして、本研究は、アジア共同学位プログラムの視点に立って、中間地点を経過した後、日本独自の教育文化があるため、

「assessment & evaluation」という西洋と同じ俎上に乗りながら、それをどのように概念枠組みと可視化を行うかにチャレンジした。レイヤー、ループ、プロセスなどシステムとしてとらえることを通じて、学校内外のシステムに7つの要素を立体的に大胆に付置することにより、複雑性とそのダイナミズムが少しでも伝達できるものとなった。

4年目となる28年度には、豪州ブリスベンでは、Assessment for Learning の第6回大会に招待されることになり、アングロサクソンからの参加者中心の会議の中でも、日本の存在感を大いにアピールすることができた。さ

らに、イスラエルでのISATT Regional Conference 2016 にも招待され、アセスメントの日本文化からのアプローチは、可視化していくことが求められ、不可欠であることが見えてきた。

この一連の流れを受けて、東北師範大学大学院博士課程の国際比較教育学の大学院生を1年間、特別研究学生として受け入れ、上記のアプローチで、日本の校内研修に関して、日英2本の論文を共著で書くことにより、2018年に博士号を東北師範大学にて取得することができた。

最終年度である29年度には、シンガポールでは、Asia Pacific Educational Assessment Conference(APEAC)第3回大会に招待され、アングロサクソンからの参加者中心の会議の中でも存在感を大いにアピールすることができた。マレーシアでのBETT (British Educational Training & Technology) Asia 2017 には、新規のアジアで市場調査した100あるうちのトップアジェンダである「アセスメント」のセッションで招待された。ヨーロッパではなく、なぜアジアなのか、集合意識をベースにするアジアなのか、模索した挙句に、とりわけ日本文化からのアプローチは可視化していくことが求められ、不可欠であることが見えてきた。インドの古代「インドラネット」の比喻を挙げて、東アジアにおける「関係」を押さえて、そのダイナミズムに手応えを感じるものとなった。

特に、この2つの招待講演と前後して、チェコの教育省IAC (Czech Institute of Academic Education) に採択された論文は、OECDのアンドレアシュライヒャー局長からは、大変興味深いフレームであるため、グローバルコンピテンシーアセスメントに関心のあるメンバーに紹介したという結論に達した。

前後して、東北師範大学では、国際比較教育学の大学院生4~50名向けの講義を担当し、今後につながるものとなった。

こうして、ダブルディグリーやジョイントディグリーという制度面での架橋づくりは軌道に乗せるに至っていないものの、アジア型エラスムンドスを日本の教育分野から、5か年の研究の積み上げとして実り多いものとなり、手応えを強く感じられるものとなった。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

### [雑誌論文](計14件)

Arimoto, Masahiro & Clark, Ian (2018) Equitable Assessment Interactions in the 'Open Learning Environment' (OLE) *European Journal of Education*. 53(2): 11-15. (査読有)

Shimajima Yasuko, Arimoto Masahiro (2017) Assessment for learning practices in Japan: Three steps forward, two steps back. *Assessment Matters* 11: 32-52. (査読有)

ARIMOTO Masahiro Cultural Contextual Perspectives of Assessment and Pedagogy: A follow-up study of distinctive schools through the lens of the "School Research Theme" in the 1980s. *Annual Bulletin, Graduate School of Education, Tohoku University*,4: 11-36 (2018-03-26) (査読無)

ARIMOTO Masahiro The Prospect of Educational Assessment as a Secret Ingredient of Effective Pedagogy in the Context of Japanese Kizuki (with-it-ness) Based on "Evidence-informed Principles for Effective Teaching and Learning" *Annual Bulletin, Graduate School of Education, Tohoku University*, 3: 11-36 (2017-03-24) (査読無)

ARIMOTO Masahiro , XU Cheng Cheng Scenarios of Education after the Tohoku Disaster : Preliminary Trial and Sketch of Connection Circle for Systems Awareness School *Annual Bulletin, Graduate School of Education, Tohoku University*,2: 7-30 (2016-03-20) (査読無)

ARIMOTO Masahiro , CLARK Ian , YAMAMOTO Saye , SHINKAWA Masamitsu Cultural Perspectives on Classroom Assessment: A Path Toward the "Japanese Assessment for Learning Network" *Annual Bulletin, Graduate School of Education, Tohoku University*,1: 41-62 (2015-03-20) (査読無)

ARIMOTO Masahiro , ISHIMORI Hiromi

Reconceptualizing assessment for learning from culturally embedded pedagogy to add further impetus to curriculum as a school-based initiatives 東北大学大学院教育学研究科研究年報,62(1): 303-323 (2013-12-27) (査読無)

池田 和正, 有本 昌弘 形成的アセスメントによる教師の職能学習の理論的背景—システム思考による「どのように学ぶのか」(LHTL: learning how to learn)を手がかりに—東北大学大学院教育学研究科研究年報 66(1),209-223 (2017-12-27) (査読無)

有本 昌弘 日本の教育アセスメント概念化に向けて(その2)—ERIC データベースからのオリジナル版「20 の扉」の活用—東北大学大学院教育学研究科研究年報,66(1),199-208 (2017-12-27) (査読無)

有本 昌弘 日本の教育アセスメント概念化に向けて(その1)—ERIC データベースからのオリジナル版「20 の扉」の活用—東北大学大学院教育学研究科研究年報 65(2),125-151 (2017-06-30) (査読無)

有本 昌弘, 濱田 眞 アセスメントによる評価の文化と秋田の小中学校—「インサイドザブラックボックス」の背後にある「グレーゾーン」にアプローチする—東北大学大学院教育学研究科研究年報,65(1),71-91 (2016-12-26) (査読無)

有本 昌弘, 徐 程成 システム思考による校内研修の実践の可視化—秋田市立築山小学校の事例研究を通して—東北大学大学院教育学研究科研究年報,64(2),193-211 (2016-06-30) (査読無)

有本 昌弘, 濱田 眞, 能見 佳央 アセスメントによる高等学校の学校改善: エビデンスに基づく予備的考察 東北大学大学院教育学研究科研究年報,63(2),223-244 (2015-06-30) (査読無)

新川 壯光, 濱田 眞, 山本 佐江, 有本 昌弘 アセスメントを活用した学校改善: OECD・REAFISO 研究と日本のエバリュエーション・アセスメント東北大学大学院教育学研究科研究年報,62(1),325-338 (2013-12-27) (査読無)

[学会発表](計9件)

Arimoto, Masahiro (2017) Using Classroom Assessment to Improve Pedagogy - the Japanese Experience (Invitation as a key note speech). APEAC 2017 (招待講演) Singapore

Arimoto, Masahiro, Looney Janet, Hamada Shin, Yamamoto Saye, Kitajima Shigeki (2017) Cultural aspects of school-wide assessment and pedagogy:

a follow-up study of teaching gap. WALIS Symposium 2017 Nagoya, Japan

Arimoto, Masahiro (2017) A New Era of Assessment. BETT (British Educational Training & Technology) Asia (招待講演) Kuala Lumpur Malaysia

Masahiro Arimoto (2016) Japan in the frame of Assessment & Evaluation and Community of Practices ISATT Regional Conference 2016(招待講演) Haifa Israel.

Arimoto, Masahiro & Shimojima, Yasuko (2016) Assessment in Japanese Cultural Contexts. 6th International Invitational Symposium on Assessment for Learning (招待講演) (国際学会) Australian Catholic university, Brisbane

Arimoto, M. & Howe, E. (2015) Narrative Teacher Education Pedagogies From Across the Pacific. 2015 Annual Meeting - American Educational Research Association at Chicago, Illinois.

有本昌弘・濱田眞・山本佐江 (2014) 秋田県学力調査の高学力の背景 日本教科教育学会第40回全国大会兵庫教育大学 (2014/08/20)

有本昌弘 (2014) 「形成的アセスメント」理解の国内での現状と今後—Assessment for Learning海外動向と日本の社会文化—日本教育大学協会研究集会(宮城教育大学)

Masahiro Arimoto, Yoshiko Goda (2013) Classroom-embedded assessment based on subject differences for high school teachers focused on “learning to learn” behind the PISA. the International Association for Educational Assessment (IAEA) Tel Aviv [http://www.iaea.info/documents/paper\\_5bc1e290.pdf](http://www.iaea.info/documents/paper_5bc1e290.pdf)

[図書](計5件)

Howe, E. R. & Arimoto, M. (2014). Narrative Teacher Education Pedagogies From Across the Pacific. In C. Craig & L. Orland-Barak (Eds.), International Teacher Education: Promising Pedagogies Advances in Research on Teaching (Part A), Vol. 22, 217-236. New York: Emerald. ISBN: 978-1-78441-136-7 (Emerald Group Publishing Limited Outstanding Author Contribution in the 2015 Emerald Literati Network Awards for Excellence 受賞論文)

有本昌弘 (監訳) 『学びのイノベーション』

—21世紀型学習の創発モデル、OECD教育研究革新センター（著、編集）、明石書店、2017

(11401)

Arimoto, M., & Clark, I. (*in press*). Interactive assessment: Cultural perspectives and practices in the nexus of 'Heart and Mind'. In J. Smith & A. Lipnevich (Eds.), *Cambridge Handbook of Instructional Feedback* (pp.....). New York: Cambridge University

(4) 海外研究協力者  
Ian Clark (米国)

Arimoto, M., Nishizuki, K., Nomi, Y., & Ishimori, H. (2017). *Pedagogical approaches to global education: A follow-up study of Tohoku School 2.0 since 2014*. Presented at the International Academic Conference on Global Education, Teaching and Learning in Vienna 2017 (IAC-GETL in Vienna 2017). Retrieved from [https://books.google.co.jp/books/about/Proceedings\\_of\\_IAC\\_in\\_Vienna\\_2017.html?id=K4MDwAAQBAJ&redir\\_esc=y](https://books.google.co.jp/books/about/Proceedings_of_IAC_in_Vienna_2017.html?id=K4MDwAAQBAJ&redir_esc=y)

有本昌弘・市瀬智紀・藤井 浩樹・伊藤葉子  
(2017) 平成27年度日本教育大学協会研究助成 大学院におけるESDルーブリック作成の試み—高等学校ユネスコスクール教員によるアセスメントに関する調査研究を通じて—日本教育大学協会年報第35集 (pp.249-259)  
2017.3.31

〔その他〕

ホームページ等  
<https://jafln.com>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

有本 昌弘 (ARIMOTO, Masahiro)  
東北大学・大学院教育学研究科・教授  
研究者番号：80193093

### (2) 研究分担者

合田 美子 (Goda, Yoshiko)  
(00433706)  
熊本大学・教授システム学研究センター  
・准教授  
(17401)

彦坂 幸毅 (Hikosaka, Kouki)  
(10272006)  
東北大学・生命科学研究科・教授  
(11301)

阿部 昇 (Abe, Noboru)  
(80323129)  
秋田大学・教育学研究科・教授